

スギ・ヒノキ科花粉症患者セルフケアの実態

—アンケート調査より—

国立大阪南病院耳鼻咽喉科

有本啓恵

同 アレルギー科

東 直人 片田圭宣

佐野耳鼻咽喉科

佐野由紀子

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

荻野 敏

スギ・ヒノキ科花粉症に対し、メディカルケアとともにセルフケアが重要とされている。2003年から当院でも花粉観測を開始し、地域住民に情報提供を始めた。住民のセルフケアの実態をアンケートにて検討した。

スギ花粉飛散開始は2月17日であったが、それ以前に34.6%の患者が受診していた。受診患者の抗原検索率は45.5%であった。84.8%のものが花粉情報を利用しており、セルフケア実施率は41.4%であった。女性の方が花粉情報利用率、セルフケア実施率が高かった。また、花粉飛散開始前受診患者・抗原検索を行ったことがあるもの・花粉情報を利用するものはセルフケアの実施率が高かった。

今後、花粉情報の活用・正しい診断とセルフケア実施に対して、患者教育が重要と思われた。

Key words : allergen — pollen information — pollinosis — questionnaire — self-care

はじめに

スギ花粉症の有病率は12~13%ともいわれ¹⁾、社会問題になっている。それとともに花粉情報・飛散予測が一般普及し、患者自身いろいろな情報を得られるようになってきた。また、メディカルケアとして初期療法が普及しつつあるが、セルフケアの重要性もいわれている²⁾³⁾。近隣在住花粉症患者セルフケアの実態はどうか。当院の花粉飛散データと患者アンケートから検討した。

対象及び方法

1. 対象

2003年1月20日~4月30日、国立大阪南病院及び数100m離れた佐野耳鼻咽喉科医院に花粉症と自己申告し、治療目的で受診した患者(男性174名、女性352名計526名)に受付でアンケート用紙を配付した。花粉症患者の実態調査という主旨・使用目的を説明したところ、男性167名、女性340名計507名で回答が得られた。回収率は96.4%(男性96.0%、女性96.6%)であった。このうち問診・検査結果等から明らかにスギ・ヒノキ科花粉症以外であると判断した症例を除き、男性160名、女性328名計488名を解析対象とした。

Received : January 15, 2004

Accepted : May 25, 2004

有本啓恵：ありもと耳鼻咽喉科〔大阪府大阪市旭区赤川2-17-2 岸本ビル1F〕

E-mail : arimoto@yo.rim.or.jp

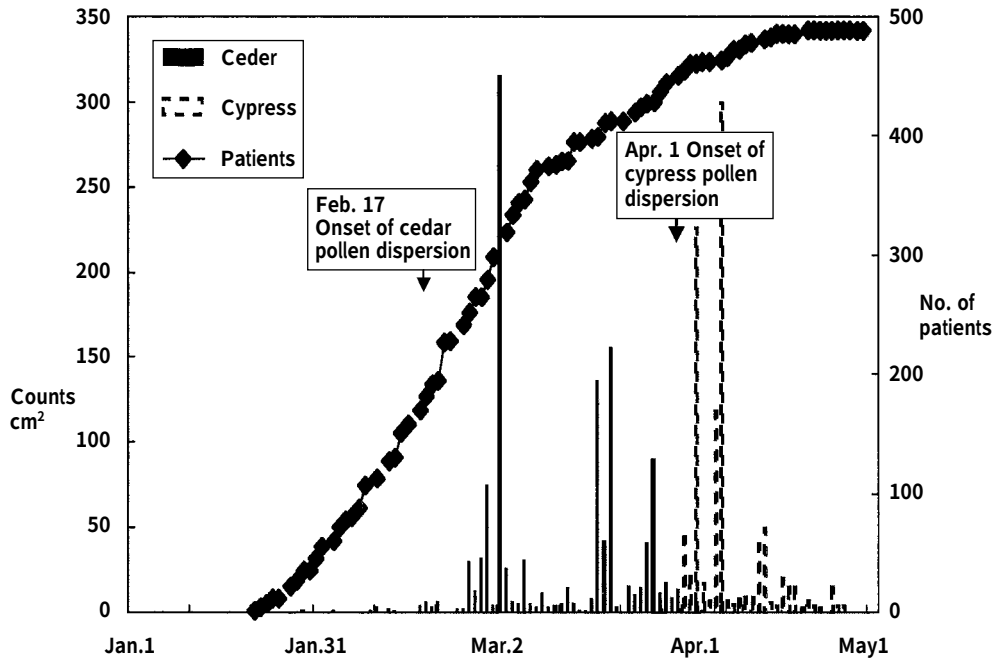


Fig. 1. Pollen dispersion and the number of patients who visited hospital and clinic.

2. 方法

1) 飛散花粉観測

飛散花粉観測はダーラム型花粉捕集器を用い当院中庭にて行った。スライドガラスの染色は genitiana-violet-glycerin jelly を用いた。

2) アンケート内容

アンケートでは年齢、性別、スギ・ヒノキ科花粉症の発症時期または年齢、抗原検索の有無及び原因抗原、今シーズンの発症日、花粉情報利用の有無、セルフケア実施の有無及び内容を記載してもらった。

3) 統計処理

統計学的検討は χ^2 検定を行い、 $p < 0.05$ を有意とした。

Table 1 Sex and age of patients with pollinosis

Age	Male	Female
～ 9	2	1
10 ～ 19	14	15
20 ～ 29	20	40
30 ～ 39	33	71
40 ～ 49	34	93
50 ～ 59	31	67
60 ～ 69	19	31
70 ～ 79	7	9
80 ～	0	1
Total	160	328

結 果

1. スギ・ヒノキ科花粉飛散と初診患者数 (Fig. 1)

当院における観測ではスギ花粉飛散開始は2月17日、最大飛散日は3月2日で314.8個/cm²、飛散終了日は4月19日であった。また、ヒノキ科花粉飛散開始は4月1日、最大飛散日は4月7日で298.8個/cm²、飛散終了日は4月29日であった。スギ花粉飛散開始以

前に男性57名(35.6%)、女性112名(34.1%)計169名(34.6%)の患者が受診していた。

2. 受診患者 (Table 1)

年齢は7～82歳にわたっており、平均は41.7±14.2歳であった。性別では女性が、年齢別では30～50歳代が多かった。

3. 花粉症発症年齢 (Fig. 2)

男性、女性ともに10歳代になると急に発症が増え、

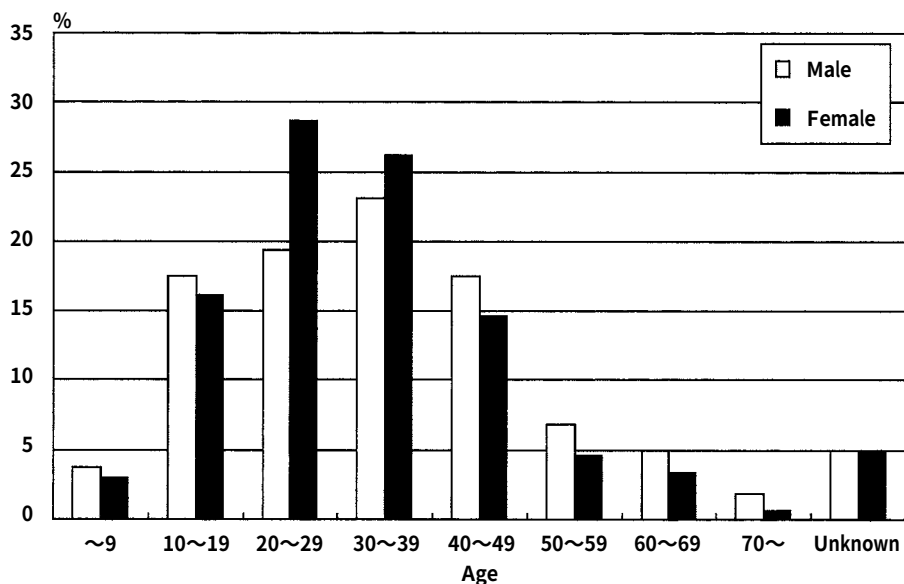


Fig. 2. Age of onset on pollinosis.

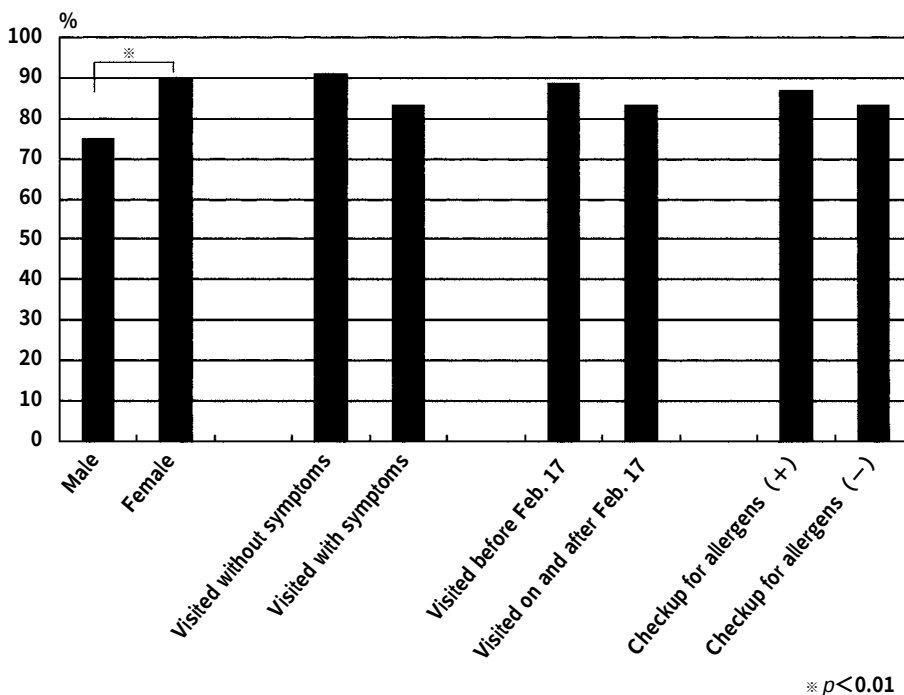


Fig. 3. The utilization of pollen information.

20~30 歳代での発症がピークであった。しかし、70 歳代発症例も見られた。平均罹病期間は 12.1 ± 7.8 年であった。

4. 抗原検索

対象患者で原因抗原を調べたことがあるものは 220 名 (45.5% 回答 484 名) であった。当院受診患者は

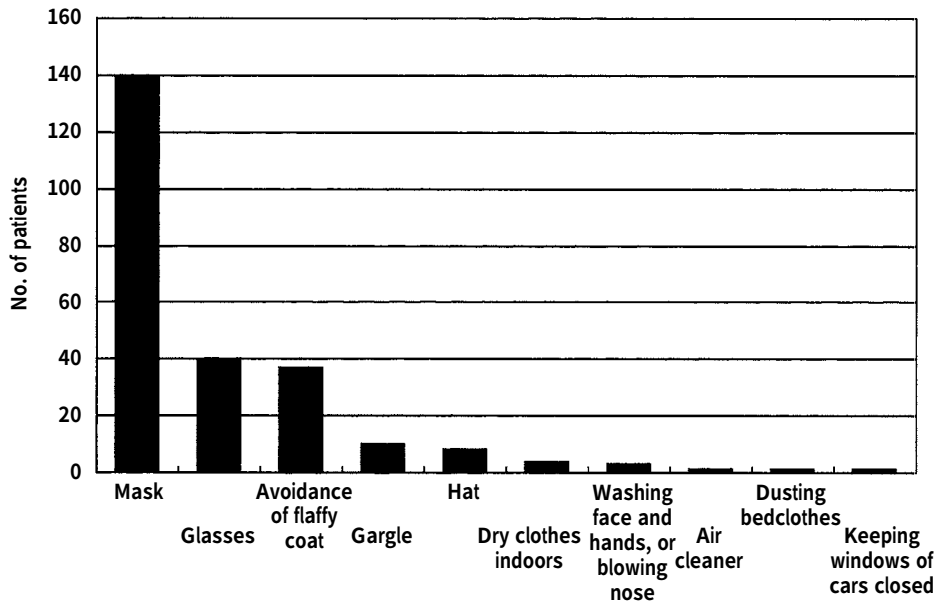


Fig. 4. Methods of self-care.

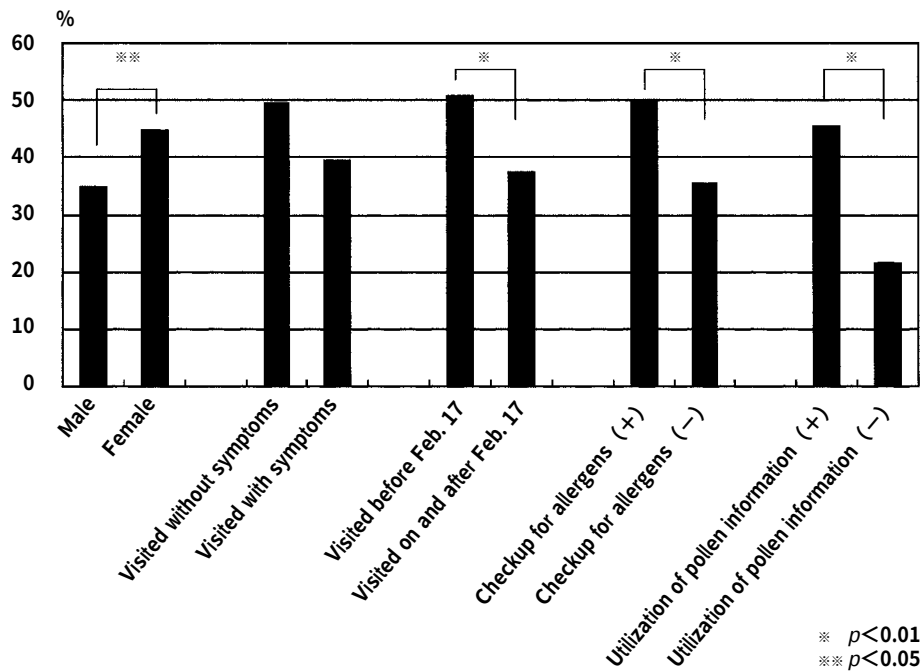


Fig. 5. The rate of patients who did self-care.

65.6% (59/90), 佐野耳鼻咽喉科受診患者は40.9% (161/394) のものが検査を受けていた。しかし、結果を「忘れた」患者が23名 (10.5% 男性5名, 女性18

名) いた。原因抗原を「スギ・ヒノキ」と回答したものは75名 (34.1%), 「スギ」は117名 (53.2%), 「ヒノキ」は5名 (2.3%) であった。当院カルテより, 51名につ

いて自己の認知度を調べた。花粉・通年性抗原全ての原因抗原を正しく答えられた患者は15名(29.4%)であった。

重複抗原は、イネ科42.0%(21/50)、ブタクサ25.0%(12/48)、ダニまたはハウスダスト36.0%(18/50)であった。

5. 症状発現から受診まで

今シーズンの症状発現後、医療機関受診までの日数をみた。未発症での受診は男性44名(27.5%)、女性69名(21.0%)計113名(23.2%)と約1/4を占めていた。発症後受診375名のうち症状発現後1週間以内に受診したものは144名(男性43名、女性101名)だった。これは、発症日を覚えていた299名(男性99名、女性200名)のうち48.2%(男性43.4%、女性50.5%)にあたる。平均で症状発現12.0±12.6日後に医療機関を受診していた。

6. 花粉情報利用の有無 (Fig. 3)

「花粉情報を利用するか」との質問で「する」の回答は413名(84.8% 回答487名)、男性120名(75.0%)、女性293名(89.6%)だった。女性が男性に比べ利用率が高く、有意差がみられた($p<0.01$) (Fig. 3)。また、発症の有無・花粉飛散開始前後の受診・抗原検索の有無の各項目を男女別に比較した。未発症受診・花粉飛散開始前受診・抗原検索有の群では花粉情報利用率に性差はなかった。しかし、発症後受診・花粉飛散開始後受診・抗原検索無の群では女性が男性より利用率が高かった。

7. セルフケア (Fig. 4・Fig. 5)

セルフケアを実施していた患者は192名(41.4%、回答464名)、男性34.7%(52/150)、女性44.6%(140/314)だった。内容はマスク、眼鏡、花粉のつきにくい衣類の順であった (Fig. 4)。実施率を各項目で比較した (Fig. 5)。男性より女性が、花粉飛散開始後受診患者より開始前受診患者が、抗原検索無のものより有のものが、花粉情報を利用しないものより利用するものが、各々セルフケア実施率は有意に高かった。また、未発症受診のものが発症後受診のものより実施率が高い傾向にあった。発症の有無・花粉飛散開始前後の受診・抗原検索の有無・花粉情報利用の有無の各項目で、性差はなかった。

考 察

花粉情報が一般に普及し、誰でもその情報が得られるようになってきた。しかし、花粉情報の有用性は測定地点からの距離に依存するといわれている⁴⁾。2002年まで、当院のある大阪府河内長野市では花粉観測が行われていなかった。しかし、アンケートでも84.8%の患者が花粉情報を利用していると答えており、近隣の花粉情報を提供することは意義が深い。観測結果を当院及び佐野耳鼻咽喉科に掲示したが、身近な花粉情報として熱心に見入る患者の姿がみられた。

当院ではリアルタイムモニターKH3000も稼働させているが、現在の飛散状況をインターネットや携帯電話またはホームページ等で閲覧できるようになれば、より精密な情報提供が可能である。気温・風速・風向といった気象条件と飛散量の関係も調査しており⁵⁾、今後は花粉観測データを蓄積し飛散予測も提供したい。

受診患者の抗原検索率は45.5%と半数以下であり、自己の抗原認知率も29.4%と低かった。治療には正しい診断が必要である。スギ花粉症と自己診断している症例で実際にスギ花粉症と診断し得るのは約80%という報告⁶⁾がある。治療に先だって正しい診断が重要であることを指導する必要もある。

セルフケアを実施している患者は41.4%と半数以下であったが、嶽らの報告でも37.3%とある⁷⁾。今回の結果で、花粉情報を利用するとの回答があったものでもセルフケア実施は半数以下であった。花粉情報の活用の仕方やセルフケアの情報はまだまだ十分ではない。抗原回避と除去はまず行うべき指導である。防御マスク、メガネによって鼻粘膜および結膜に侵入する花粉数を減少できることは示されており⁸⁾⁹⁾、市販マスクの性能も報告がある¹⁰⁾。花粉情報を提供するだけにとどまらず、具体的なセルフケア指導を行い、実施率をあげるべきであろう。

性別では、男性より女性の方がセルフケア実施に積極的であった。また、花粉飛散開始後受診患者より開始前受診患者が、花粉情報を利用するものはしないものより実施率が有意に高く、花粉症に対する意識の高さがセルフケア実施につながっていると考えられる。

また、抗原検索有のものは無のものより、セルフケア実施率が有意に高かった。正しい原因抗原の認識で、セルフケアに対する意識が高まることも期待したい。

一方、未発症で受診した患者は23.2%にのぼった。

「2003年の花粉飛散開始は2月上旬になること」,「初期療法の有用性」が,マスメディアでも盛んに流された。このことは早期のメディカルケア実施には結びついたと考えられる。

今後,花粉情報の活用・正しい診断とセルフケア実施に対しての患者教育が重要と考える。当科では,個々の患者指導のみならず地域住民を対象にした学習会・パンフレット配付も実施している。近隣の花粉情報が提供されることによって,今後セルフケアに対する意識がどう変化していくのかも検討していきたい。

まとめ

1) スギ・ヒノキ科花粉飛散と花粉症患者セルフケアの実態をアンケートから検討した。

2) 花粉飛散開始以前に34.6%が受診しており,その患者はセルフケアの実施率も高かった。

3) 受診患者の抗原検索率は45.5%であった。

4) 84.8%の患者が花粉情報を利用していた。

5) 女性の方が花粉情報利用率,セルフケア実施率が高かった。

6) セルフケアを実施していた患者は41.4%だった。抗原検索を行ったことがあるもの・花粉情報を利用するものは実施率が高かった。

7) 今後,花粉情報の活用・正しい診断とセルフケア実施に対して,患者教育をしていく必要がある。

文 献

- 1) 奥田 稔:スギ花粉症の疫学. 日本医事新報 **4093**, 17-24, 2002.
- 2) 鼻アレルギー診療ガイドライン—通年性鼻炎と花粉症—. 2002年度版(改定第4版)鼻アレルギー診療ガイドライン作成委員会. ライフ・サイエンス, 東京, 2002.
- 3) 榎本雅夫, 嶽 良博:花粉症の自己管理. *Prog. Med.* **18**, 2796-2799, 1998.
- 4) 後藤 穰, 大久保公裕, 奥田 稔:空中スギ花粉飛散—スギ山から患者まで—. *Prog. Med.* **20**, 2417-2420, 2000.
- 5) 木村淑美, 有本啓恵, 佐野由紀子, 藤井可絵, 荻野敏:スギ・ヒノキ花粉飛散と気象状況. 耳鼻臨床 **97**(8), 2004. (印刷中)
- 6) 荻野 敏, 荻野 仁, 馬場謙治, 金田重人:スギ花粉症自己診断例のアレルゲン陽性率. 耳鼻臨床 **94**, 1073-1078, 2001.
- 7) 嶽 良博, 榎本雅夫, 碓田猛真, 斉藤優子, 瀬野悟史, 他:スギ花粉症患者における花粉回避のためのセルフケアの実態. 耳展 **46**, 51-56, 2003.
- 8) 後藤 穰, 大久保公裕:スギ花粉症症例における花粉防御具の効果の客観的評価. アレルギー科 **15**, 120-123, 2003.
- 9) Xiao, S.F., Okuda, M., Tanimoto, H.: Inhibitory effect of half-face masks on inhibition of particles of carbon powder and Japanese cedar pollen. *Am. J. Rhinol.* **5**, 57-60, 1991.
- 10) 榎本雅夫:スギ花粉症回避のためのセルフケアとその評価. アレルギー科 **7**, 218-224, 1999.

本論文の要旨は第53回アレルギー学会総会で報告した。

SELF-CARE FOR POLLINOSIS OF CEDAR AND CYPRESS
—FROM A QUESTIONNAIRE SURVEY—

Hiroe Arimoto¹⁾, Naoto Azuma²⁾, Yoshinori Katada²⁾, Yukiko Sano³⁾ and Satoshi Ogino⁴⁾

¹⁾*Department of Otorhinolaryngology, National Osaka-Minami Hospital*

²⁾*Department of Allergy, National Osaka-Minami Hospital*

³⁾*Sano ENT Clinic*

⁴⁾*Graduated School of Allied Health Sciences, Faculty of Medicine, Osaka University*

For patients with pollinosis, self-care is important as well as medical care. In this study, we investigated the real situation of patients with pollinosis-how they manage their symptoms. A questionnaire-based examination was conducted among 488 patients who visited National Osaka-Minami hospital and Sano ENT clinic.

The onset of pollen dispersion occurred 17th Feb. 34.6% of patients visited before the onset of pollen dispersion. 45.5% of them had a checkup for allergens. 84.8% of them utilized pollen information. 41.4% of them did self-care.

The rate of patients who utilized pollen information and did self-care was higher in female compared with male. The rate of those who did self-care was significantly higher in the patients who visited before pollen dispersion, who had a checkup for allergens, who utilized pollen information, compared with the patients did not.

It is necessary to show the information of self-care as well as pollen, and suggest the importance of self-care against pollen allergens.
